



熱海オーシャンカップパワーボートレースは、国際的にも知名度のある、我が国最大のパワーボートレース大会で、1968（昭和43）年に東京都モーターボート連盟及び読売新聞社、報知新聞社が主体となって第1回大会が開催され、第2回大会以降は（財）日本モーターボート協会、1991（平成3）年第24回からは（財）マリンスポーツ財団の主催で、毎年「海の記念日」協賛事業として、静岡県熱海市・熱海湾において開催されてきた。

日本のオフショア界をリードしてきた大会であったが、水面状況、会場スペース、経済的な状況、安全対策等の問題で1995（平成7）年の第28回大会で中断している。

第1回大会

第1回大会は、1968（昭和43）年7月14日（日）に実施された。

コースは長距離のAコースが熱海～初島を10往復する200km。湾内Bコースは4点マーク周回で1周2kmを5周10kmに設定された。参加艇は68隻、参加選手は100名であった。

地元熱海市ではモーターボートレースを初めて熱海湾で行うとあって、市、観光協会をはじめ関係団体が大変な熱の入れようで、いわば全市挙げての歓迎ぶりであった。

参加艇は、Bコースの艇はほとんど10フィート台のランナバウトで、エンジンは国産船外機のヤマト、フジが大勢を占めている。Aコースでは艇の長さ14フィートから20フィートが主力で、24フィートというのが1隻だけ当時としてはとても大きく見えたものである。

エンジンは船外機でマーキュリー、船内機ではマークルーザーが多く、OMCやボルボが少し、クライスラーの325馬力7,000ccが他を圧していた。まだレーシング用のドライブを用いた選手はなく、Aコース出場艇は市販艇そのものであった。

成績は、Bコースの総合でCクラスの中村章（湘南パワーボートクラブ）がハイドロ3Pにクレセント55馬力で11分の最高タイムを記録。

AコースはSクラスの大塚博一・大塚俊雄組が2時間35分の苦闘の未優勝し初のオーシャンカップに輝いた。完走艇は僅か5隻であった。



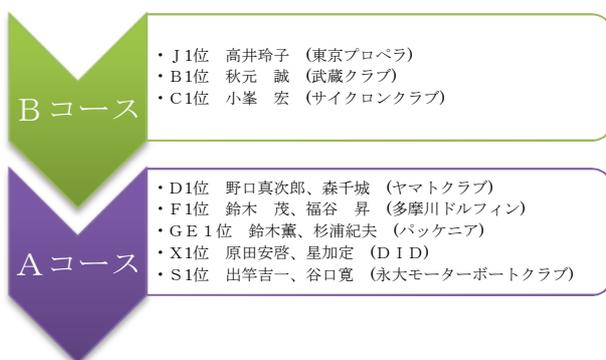
第2回大会

第2回大会は、1969(昭和44)年7月13日(日)に実施された。

第1回でコースミスが多発し、リタイヤ続出のためAコースは熱海湾～沖合5kmチェックポイントと距離を半分に縮め周回数を20周と倍増して200kmとした。

このときは、Bコース67隻Aコース25隻が出場した。選手は両方で118名であった。レースは、Bコースの総合でCクラスの小峯宏選手(サイクロンクラブ)がケーニッヒ50馬力のランナーで9分35秒の好タイムで優勝した。

Aコースは、Sクラスの出竿吉一・谷口寛組(永大モーターボートクラブ)が、永大PB480/16フィートランナーにマークルーザー160馬力で、2時間36分30秒のタイムで優勝。このときの規定周回数を完走したのは出場25隻中6隻であった。



第3回大会

第3回大会は、1970(昭和45)年7月19日(日)に実施された。

コースは第2回と同じだが、BコースのJ級は、1周2kmで行われた。この大会では、海洋レクリエーションへの関心のたかまりとともに、参加は136隻182名と急増した。女性選手も2名となり、レース艇らしいボート、エンジンが登場するのもこの年からである。なかでもAコースのホルマンムーディー搭載エンジンが6隻も出たのをはじめインターセプター、YK-L6スペシャルなど新顔がぞくぞくと出場した。当日のレースコンディションは良くなかったが、Aコースの完走艇は優勝した東海マリンの吉川勝人・鷺尾貢組(平岡クラフト・ランナ/ホルマンムーディー290馬力5,751cc)を含め僅か2隻、優勝タイムは2時間55分5秒。



なお、Bコースの総合は佐藤勝夫選手(スパイラル、ランナ/ヤマト65)が、7分10秒で優勝した。

第4回大会

第4回大会は、1971(昭和46)年7月18日(日)に実施された。

この年から、Aコースは熱海～沖合4kmで1周10kmを8kmに変更、これを20周する160kmレースに短縮して行われた。Bコースも5周101kmから3周6kmに短縮した。

この大会からストッククラスを設定し、比較的レース経験の少ない選手にも門戸が広げられた。Aコースは、ボートもエンジンもかなり変化が見られた、9mという超大型艇をはじめ、8m～7mクラスがぞくぞくと登場し、なかには5人乗りというものまで参加した。

エンジンはホルマンムーディー400馬力というスーパーエンジンをはじめ、400～300馬力の大物が数多く出場し、Aコースのスタートは海面一杯に走り回るので壮観そのものであった。Bコースは総合で小林英雄選手(スパイラルクラブ)がヤマト70R-1で6分12秒で優勝。Aコースは、コンコード19にホルマンムーディー235馬力のヨリトモレー



シングチームの佐野武司・横山昇組が、マーキュリー135馬力2基がけの杉浦伊豆美・高橋勝之組(バツェニアクラブ)と最後まで接戦した末2時間7分33秒で総合優勝した。

第5回大会

第5回大会は、1972(昭和47)年7月16日が台風の影響で翌日の17日に延期実施された。参加艇は、Bコース206隻、Aコース53隻であった。選手は常連のほか今年始めてスウェーデンからバーシー・トレロ選手が参加し、フュジュティブSD16にアルキメデスペンタ600D級で優勝した。

Aコースは、昨年優勝した佐野武司選手が2連勝。1時間48分7秒でヨリトモレーシングクラブの佐野武司・田島弘・牧野圭吾組(ヤマハ28STR/ホルマンムーディー350馬力2基がけ)に対して、Aコースで最高タイムを出した艇として今回から運輸大臣旗が贈られることになった。



第6回大会

第6回大会は、1973(昭和48)年7月20日(金)に実施された。

今回は、参加艇多数のため事故防止の見地から、Bコースは、受け付け隻数を制限することにした。当日は雨天で波高もあり悪天候のなかで、Bコース58隻、Aコース34隻が参加した。

今大会からU. I. M. ルールに従ってレースを運営した。

Aコースでは、総合優勝からオフショアクラスが除外されたため、スマグラー21/ホルマンムーディー360馬力でローデムレーシングクラブの中沼政治・岩井義範組が1時間24分8秒で優勝した。なお、最高タイムの1時間22分を記録した東海マリクラブの吉川勝人・渡部達夫・大堀治男組(平岡クラフト/キーケファアエアロマリン7600cc600馬力)は、オフショアクラスの最高タイム賞として運輸大臣旗が授与された。



第7回大会

第7回大会は、1974(昭和49)年7月20日(金)に実施された。

天候は小雨が断続的に降るあいにくの天気であつたが、Bコース91隻、Aコース61隻が参加した。ボートではカタリナ、シーレイ、カキノア、コレクトクラフト、リンフォース。エンジンでは、カルニッチ、ダイヤモンド(国産)、GM等。Bコース総合では中村章(フュジュティブ・ユウラー、クレセント600)が優勝した。

Aコースは、マーキュリー150馬力4基がけヤマハ28STR、OZクラス出場の淀川モーターボートクラブの星加定・星加忠夫・原田安啓組が総合優勝した。

A
コース 1周8km 20周160km

・SD	1位	斉藤幸雄、後藤 孝	MGマリクラブ	2時間09分58秒
・SE	1位	根建満行、高島一之	日本ダッシュ	2時間10分06秒
・SN	1位	岡田 昭、二宮克彦	マリフォース	2時間10分18秒
・OF	1位	和田正武、和田 明	浜松パワーボート	2時間07分48秒
・ON	1位	洞江則之、長野勝之	静岡パワーボート	2時間07分32秒
・OZ	1位	星加 定、原田安啓	淀川モーターボート	2時間07分21秒
・S3	1位	岩本庄三、伊藤 宏	芦ノ湖マリン	2時間11分23秒
・S5	1位	中出忠宣、横山 昇	ヨリトモレーシング	2時間13分51秒
・S6	1位	鷺尾 貢、永広淳一	大和クラブ	2時間12分15秒
・R00	1位	三原利彦、矢野喜一郎、佐伯嘉昭	ヨリトモレーシング	2時間15分17秒



第8回大会

第8回大会は、1975(昭和50)年7月19日(土)に実施された。

久し振りの好天に恵まれた大会で、参加艇はBコース67隻、Aコースは、63隻であった。前年9月1日から施行された小型船舶安全規則に基づき検査済みでなければ参加は認められなくなった。また、レースコースが航行区域に含まれない艇については臨時変更の手続きが必要となった。

マグナム33、ラム26レーシングボート、アローフレチャー等最新鋭艇がエントリーし、エンジンもディーゼルのキャタピラー3208CAT 20, 800ccやエアロマリン等が参加した。

成績は、Bコースでは、杉浦伊豆美(サイクロンクラブ)が3分15秒で総合優勝。

Aコースはヤマハ27改造艇、V8アルミブロックのホルマンムーディー494インジェクションエンジンの佐野武司・前田俊衛組(ヨリトモレーシング)が1時間28分57秒で3回目の総合優勝を果たし運輸大臣旗を獲得した。



第9回大会

第9回大会は、1976(昭和51)年7月24日(土)に実施された。

この年は、レース用モーターボートの登録制度が改正され、レーシング用とスポーツ用の2系統に分離され、艇番の表示も改められた。

コースもより本格的な外洋レースにふさわしいものに改められ、Aコースはマークを初島沖に移動し1周20kmを10周200kmとし、湾内コースも1周4kmとしヒート制を廃止し、10周40kmのB1と3周12kmのB2の2コースとなった。

成績はB2でチームパイレーツの川島徹也(フュジュティブ・ウイング14/クレセント450)が8分31秒、B1は、東海マリンの大堀治男(TMC17R・マーキュリー・ツイスター)、Aコースは、エアロマリンKAM468、ラム28の片山佑男・黒川啓明組(鬼崎レーシング)が参加2年目の1時間46分17秒で優勝し、熱海オーシャンカップと運輸大臣旗を獲得した。



第10回大会

第10回大会は、1977(昭和52)年7月23日(土)に実施された。

参加艇88隻、129名の選手が出場した。B2コース(1周4km3周)では、大和レーシングの米村伸一(トーハツ)が8分21秒で優勝。B1(1周4km10周)は、東海マリンの大村正法(TMC・マーキュリーツイスターII X)が27隻の中22分55秒で優勝を飾った。

Aコース(1周20km10周)は東海マリンの吉川勝人・渡部達夫組(フレツチャー25/エアロマリン468)が、1時間43分16秒で優勝した。



第11回大会

第11回大会は、1978(昭和53)年7月29日(土)70隻112名の選手が参加して実施された。

B1コースは出場艇が年々高性能化するので、1周4km10周40kmを改め、20周80kmと距離を倍増させた。

B1コースは、関西阪奈会の三原利彦選手が、マーキュリーツイスターで、47分27秒の最高タイムで優勝。B2コース(1周4km3周)は、トーハツ勢が圧倒的な強さを発揮連覇した。

Aコース(1周20km10周)は、東京パワーボートクラブの鈴木俊介・叶邦彦組のニューエンジン・マークルーザー テンペストが1時間47分02秒で出場14隻のなかで栄光に輝いた。



第12回大会

第12回大会は、1979(昭和54)年7月28日(土)に実施された。

今大会には、本格的なオフショアレーサー・ロッキー青木がベニハナ・パートラム38にKAM468の2基がけで参加した。

B2(1周4km5周)は、佐藤敏明(トーハツ)が、22分29秒の最高タイム賞。B1(1周4km20周)は、関西阪奈会の三原利彦がビクトリー23R/マーキュリーツイスターIIで、58分52秒で優勝した。Aコース(1周20km10周)は、関西阪奈会・ベニハナレーシングのロッキー青木・三原利彦・中地淳一組が、1時間52分46秒で優勝した。しかし、本大会で辻村勇選手が事故死するという悲劇が発生した。

第13回大会

第13回大会は、1980(昭和55)年7月19日(土)に、62隻92名の選手が参加して実施された。

B2コース(1周4km5周)は、SCクラスの米村伸一(大和レーシング)が、23分23秒の最高タイム。

B1コース(1周4km20周)は、ONクラスの吉川修一(東海マリン)が、1時間10分12秒の最高タイム。

Aコース(1周20km10周)は、前回スタート直後に事故が発生したので安全対策に万全を期し、慎重にローリングスタートを行った。レースは、1時間55分22秒の最高タイムでローデムレーシングチームの島見勝・西岡文弘・佐野武司組に運輸大臣旗が授与された。なお、R00クラスで優勝した鈴木俊介・矢須親二組(東京パワーボート)にはヨリトモ杯が贈られた。

第14回大会

第14回大会は、1981(昭和56)年7月18日(土)に90隻が参加して行われた。

今大会から、Aコース2時間(1周20km)、B1コース1時間(1周4km)の耐久レース方式が採用された。また、新たにCコース(1周1km4周)、OSB(ストック・レーシング・アウトボード)クラスが設けられた。Cコースは、ヤマト一色、外人選手はジム・ローペン(ヤマト)、B2コース(1周4km5周)には女子2名が参加した。

成績は、Aコースはオフショアクラス・ローデムレーシングの島見勝・薄井一美・佐野武司組(マグナムハスラー33/マークルーザートルネード2基がけ)が2時間00分50秒で優勝。

B1は、ONクラスの高橋正美(岡山ブルーマリン)、B2は、SCクラスの鷺尾章(大和レーシング)、Cコースは、OSBクラスの清水幸和(衣浦レーシング)がそれぞれ優勝した。

ヨリトモ杯は、R00クラスの鷺尾貢・臼井功組(大和レーシング)が獲得した。



第15回大会

第15回は、1982(昭和57)年7月31日(土)に77隻が参加した。

1周1.6kmを3周するCコースレースでは、OSBクラスはレーシング80の高橋常一、SCクラス サンダーバードレーシングの川島徹也、SDクラスのフュジュティブレーシング大和久多久郎の各選手がそれぞれ1位。

Bコースの1周4kmで行われた1時間耐久レースでは、SEクラスがフュジュティブレーシングの小西昭典、SNクラスは横浜レーシングの立川駿一、渡辺邦男、ONクラスではチーム1の氏家憲治の各選手が1位。

熱海～初島沖1周20km2時間耐久レースのAコースでは、R5クラスがハリヤーVでコバラレーシングの小原一彦・小原久義、S6クラスがVランナーでホープマリンの原田亮・小原信一、R6クラスではアルバトロスでカワイレーシングの河合誠、R00クラスがビクトリー28で東海マリンの吉川勝人・寺山幸弘、OFFクラスではパートラム38で関西阪奈会の三原利彦・中地淳一の各選手がそれぞれ1位となった。

Cコース 1周1.6km 3周(4.8km)

- ・OSB 1位 高橋常一 (レーシング80)
- ・SC 1位 川島徹也 (サンダーバードレーシング)
- ・SD 1位 大和久多久郎 (フュジュティブレーシング)

Bコース 1周4km(1時間耐久レース)

- ・SE 1位 小西昭典 (フュジュティブレーシング) 1時間02分14秒
- ・SN 1位 立川駿一・渡辺邦男 (横浜レーシング) 1時間03分48秒
- ・ON 1位 氏家憲治 (チーム1) 1時間01分06秒

Aコース 1周20km(2時間耐久レース)

- ・1位 原田亮・小西信一 (ホープマリン) 2時間02分07秒
- ・R6 1位 河合誠・肆谷章 (カワイレーシング) 2時間01分10秒
- ・R00 1位 吉川勝人・寺山幸弘 (東海マリン) 2時間08分03秒
- ・OFF 1位 三原利彦・中地淳一 (関西阪奈会) 2時間03分20秒

第16回大会

第16回大会は、1983(昭和58)年7月23日(土)に国内各地から53隻が参加実施された。

当日は低気圧の影響で南風が強く、沖合はかなりのうねりがあり、レースコンディションは良くなかった。9時15分第1レース湾内Cコースを皮切りにレース開始、午後1時10分、29隻の大型艇が一斉にスタート、メインイベント初島沖まで1周20km Aコースで争われる2時間耐久レースが開始された。



Cコース1周1.6km3周では、OS400クラスはZEROレーシングの大村正法、SCクラスではサンダーバードレーシングの川島徹也の各選手が1位となった。

1周4kmの1時間耐久レースBコースでは、SDクラスはスパイラルの小林英雄、SEクラスはフュジュティブレーシングの小西昭典、SNクラスはカワイレーシングの稲垣国三郎、ONクラスはチーム1の氏家憲治の各選手がそれぞれ1位。

1周15km2時間の耐久レースAコースでは、OZクラスのフリーダムレーシング・カワイレーシングの村井雅彦・鈴木敏元、S6クラスは横須賀モーターボートの剣持実・竹山博、R6クラスがフリーダムレーシングクラブの竹内俊郎・浜村裕幸、R00クラスがコバラレーシングの小原一彦・小原久義、OFFクラスが関西阪奈会の三原利彦・中地淳一・戸谷秀樹の各選手がそれぞれ1位であった。

Cコース 1周1.6km 3周 (4.8km)

・OS400	1位	大村正法	(ZEROレーシング)
・SC	1位	川島徹也	(サンダーバードレーシング)

Bコース 1周4km (1時間耐久レース)

・SD	1位	小林英雄	(スパイラル)	1時間04分09秒
・SE	1位	小西昭典	(フュジュティブレーシング)	1時間02分24秒
・SN	1位	稲垣国三郎	(カワイレーシング)	1時間03分04秒
・ON	1位	氏家憲治	(チーム1)	1時間02分49秒

Aコース 1周20km (2時間耐久レース)

・OZ	1位	村井雅彦・鈴木敏元	(フリーダム・カワイR)	2時間
・S6	1位	剣持実・竹山博	(横須賀モーターボートクラブ)	2時間04分29秒
・R6	1位	竹内俊郎・浜村裕幸	(フリーダムレーシング)	2時間08分57秒
・R00	1位	小原一彦・小原久義	(コバラレーシング)	2時間05分53秒
・OFF	1位	三原利彦・中地淳一・戸谷秀樹	(関西阪奈会)	2時間03分20秒

第17回大会

第17回大会は、1984(昭和59)年7月28日(土)に65隻が参加した。

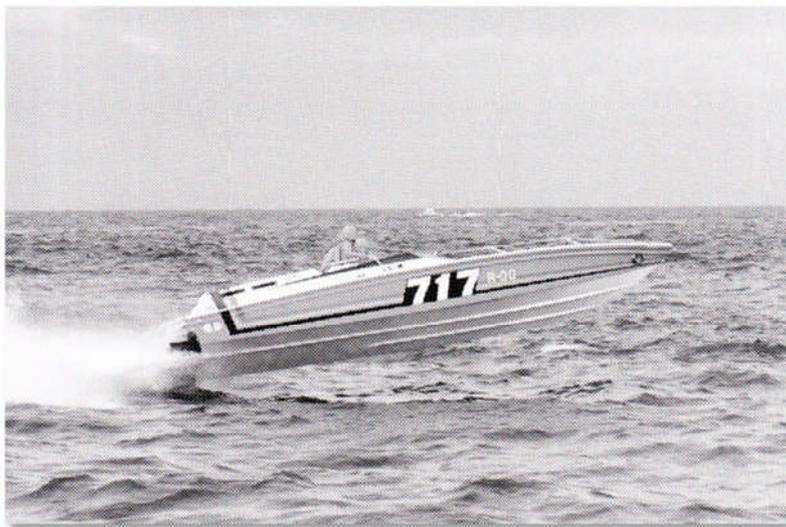
本年は、熱海の港湾工事でコース変更が余儀なくされ、観客にはレースが見にくいことが残念で、しかもあいにくの悪天候も重なり雨と高波のなかでの最悪のレースとなった。9時40分、Cコース第1ヒートが始まったが OS400クラスの小型艇は高波に翻弄され連続ジャンプで転覆するなど悪コンディション下のレースとなった、そのためか第2ヒートでは、全艇が第2マーク不通過という前代未聞の珍事が発生した。

BコースではパワーのあるON艇が総合優勝。Aコースでは日本ではじめてアーネソンドライブを装着した最新鋭のクーガーカタマラン38を操縦する関西阪奈会所属の三原利彦・中地淳一の両選手及び最近連勝している東海マリンのビクトリーキャット30の吉川勝人・吉川修一・北原秀一の3選手を抑えてチーム1のシガレット28SS8.50mを操縦する杉浦伊豆美・氏家憲治・中島修の3選手が堅実な航走を見せて優勝を勝ち取った。

1.6km3周Cコースは、OS400クラスの戸田モーターボートクラブ上野和彦、SGクラスのサンターバードレーシング川島徹也の各選手が1位。総合では戸田モーターボートクラブの上野が優勝した。

1周4km1時間耐久Bコースは、SDクラスのスパイラルレーシングの小林英雄、SEクラスの浜松パワーボートの和田正武、SNクラスのチーム1の鈴木勝利、ONクラスは横浜レーシングの下里博文の各選手が1位。総合では横浜レーシングの下里博文が優勝。

1周13km2時間耐久レースAコースは、S5クラスの湘南マリン・マーチレーシングの宮村俊秀・石川弘卓、R5クラスはシブヤレーシング・関西阪奈会・ヤマトの渋谷正義・小西量彦・笹川和弘、S6クラスは高田レーシングチームの梶野康夫・柳三郎、R6クラスは倉敷パワーボートの広永春吉・田中克彦、R00クラスはチーム1の中島修・杉浦伊豆美・氏家憲治、OFFクラスは東海マリンの吉川勝人・吉川修一・北原秀一の各選手が1位であった。総合ではチーム1の中島修・杉浦伊豆美・氏家憲治が優勝。



第18回大会

第18回大会は、1985(昭和60)年7月27日(土)72隻が参加した。

今年も熱海港の改修工事が行われており、しかも南の海上の台風の影響でうねりが防波堤を洗う状況の中でのレースとなった。Cコースには横山やすし、具志堅用高等話題のある著名な選手が出場した。Aコースにはチーム1のシガレット、リキレーシングのシグマ、コバラレーシングのシグマ等がエントリーしている。Aコースでは折からの悪天候高波のためか、スタート20分後早くもリタイヤ続出、ヨシヤレーシングのビクトリーキャットがチーム1のシガレットの猛追をかわしAコース最高タイムで運輸大臣旗を獲得した。

1周1.5km3周Cコースは、OS400横山レーシングの横山やすし、SCクラスで東海マリンの早川俊晴、STCクラスはチームエビンルードの長谷川信一の各選手がそれぞれ1位。総合優勝は横山やすしが獲得した。

1周4km1時間耐久レースBコースは、SDクラスがスパイラルレーシング小林英雄、SEクラスはチームエビンルードの長谷川信一、SNクラスはチーム1の鈴木裕一、ONクラスは横浜レーシングの下里和美・持田秀夫の各選手が1位。総合優勝は横浜レーシングの下里和美・持田秀夫の両選手だった。

1周15km2時間耐久レースAコースは、OZクラスのヨシヤレーシングの吉川修一・寺山幸弘、S5クラスはマーチレーシングの宮村俊秀・高橋政治、S6クラスはホープマリン・スパイラルレーシングの原田亮・水口勝弘、R6クラスは岡山ブルーマリンの広永春吉・田中克美、R00クラスではチーム1の杉浦伊豆美・氏家憲治・茂木和之、OFFクラスはヨシヤレーシングの吉川勝人・佐野武司 小林正和の各選手が1位。総合優勝はヨシヤレーシングの吉川勝人・佐野武司・小林正和組であった。

第19回大会

第19回大会は、1986(昭和61)年8月2日(土)に71隻が参加した。

今年から開会式が前夜選手会に引き続き行われることになり、大会当日は競技に専念出来るようになり大会運営が合理化された。今年の特徴は、Aコースの大型艇に外人ドライバー2名が参加したこと、世界的著名なマシンであるキーケフアーエアロマリン、マークルーザー474、マークルーザー500EF1等が登場したことでAコース出場艇の国際化やマシンの水準が高まったこと、Cコースには小型競技用ヤマト102型エンジンが多く登場し技術水準の高い国産機によるハイレベルのレースが定着したこと、女性や初心者ドライバーが乗れるSTCワンデザインクラスが登場してモーターボートレースの大衆化の傾向が進んだことである。

1周15km2時間耐久レースAコースは、OZクラスはヨシヤクラブの高橋政治・小澤一男、SZクラスはファントムレーシングの安達雅和・村上一郎、S5クラスは芦ノ湖マーチレー

シングの宮村俊秀・佐野篤志、S6クラスが和歌山レーシングの中西勝広・上野広行、R6クラスは倉敷パワーボートクラブの葛島武憲・真田昌生、S00クラスは東京KIDSレーシングの岡田正雄・佐藤和久・関根真奈美、R00クラスはアラサキレーシング・横山レーシングの北条茂・津島英郎・横山やすし、OFFクラスはヨシヤレーシングの小林正和、デニー・ヘジャー、ボブ・アイドニーの各選手が1位。総合最高タイム賞はヨシヤレーシングの小林正和、デニー・ヘジャー、ボブ・アイドニーの3選手に与えられた。

1周4km1時間耐久レースは、SDクラスがスパイラルレーシングの小林英雄、SEクラスが天竜レーシングクラブの近藤政利、SNクラスはパワーボートクラブ兵庫の柳三郎、ONクラスが横浜レーシングの鈴木公雄・星野秀樹の各選手がそれぞれ1位。

Bコースの最高タイム賞は横浜レーシングの鈴木公雄・星野秀樹の両選手に授与された。

1周1.5km3周Cコースは、OS400クラスがスパイラルレーシングの小林英雄、SCクラスはZEROレーシングの小鷹卓郎、STCクラスはかんむりわしレーシングの丸山敏子が1位を占めた。Cコース最高タイム賞は横山やすし選手に与えられた。

運輸大臣旗はAコースの勝者ヨシヤの小林正和のクルーに、ベストドレスァ賞には東京KIDSの阿部学に、レディース賞にはSTCクラスに出場したチーム1の葉山玲子、STCクラスに出場したかんむりわしレーシングの丸山敏子、S00クラス出場した東京KIDSの関根真奈美の各女子選手にそれぞれ与えられた。



第20回大会

第20回大会は、1987(昭和62)年8月1日(土)に94隻が参加した。

Aコースにアパッチ41、クーガー36、クーガー43、ビクトリーCAT30、インペリアル33等の海外の大会に出場しているそうそうたる大型カタマランの新鋭艇が熱海に勢揃いした。

ようやく日本のオフショアレースも世界的に肩を並べるようになったといえよう。CコースではファッションメーカーのセラーズがS500クラスに女性クルーだけで5隻エントリーしたが、これは最近の日本で活躍目覚ましいウーマンパワーのあらわれか。1周15km90分耐久Aコースは、OFFオープンクラスはKEレーシングの小嶋松久・ハロルド・スミス、OFFスーパークラスはヨシヤレーシングの小林正和・ボブ・アイドニー、OFF2クラスは芦ノ湖マーチレーシングの田中耕司・大田友次、OFF3クラスは芦ノ湖マー

チレーシングの佐野武司・佐野篤志、OFF4クラスが倉敷パワーボートクラブ・岡山マッハレーシングの葛島武憲・角野真一、NT8クラスは芦ノ湖レーシングの中島誠人・鈴木ルミ子、NR3クラスは芦ノ湖マーチレーシングの宮村俊秀・小林一義、NS2クラスはビルドパワーボートの吉元蔵之・齊藤定行、NS3クラスは芦ノ湖レーシング・かんむりわしレーシングの石川忠明・小西昭典、OFF1クラスは大洋マリクラブの藤井省三・布目浩人の各選手が1位。コース総合優勝は、アパッチ41に乗艇したKEの小嶋松久・ハロルド・スミスの両選手が受賞した。1周4km60分耐久Bコースでは、S850クラスが芦ノ湖レーシングの丸山清隆、NT2クラスがZEROレーシングの小鷹卓郎、NT3クラスはスパイラルレーシングの小林英雄、NT4クラスは讃岐レーシングの寺田利行、NT7クラスはチーム1の鈴木裕一の各選手が1位。コース総合優勝は、チーム1の鈴木裕一選手であった。



1周2.0km3周Cコースでは、NOD4クラスがZEROレーシングの大村正法、S500クラスはアラサキレーシングの山口三郎、NOD2クラスはシブヤスピードショップの森谷修三、NOD3クラスはスパイラルレーシングの小林英雄の各選手が1位となった。

第21回大会

第21回大会は、1988(昭和63)年7月30日(土)に32隻が参加した。

今年は、第三管区海上保安庁本部の協力で特殊救難隊のレスキュー隊の応援参加を得て、万全な救助体制を敷いた。

オープニングセレモニーには学生援護会の協力でミス・アタミ・オーシャンカップ・コンテストが盛大に催され人気を集め、ニュース取材陣もフジテレビが7台のカメラを投入、また6隻の報道艇が間断なく就航する等職烈な報道合戦が繰り広げられ宣伝効果はいやが上にも盛りあがった。

1周15km90分耐久Aコースは、NT8クラスはチームラビットの大平哲也・小野繁、NR3クラスは芦ノ湖マーチレーシングの宮村俊彦・小林一義、NS2クラスは熱海ドルフィンクラブ・熱海モーターボート水上スキー協会の岡田昭・宇佐美定行、OFF1クラスは大洋マリクラブの田川正樹・布目浩人、OFF2クラスは名古屋レーシングの船迫俊一・後藤幸泰、OFF3クラスは名古屋レーシングの赤塚勝彦・赤塚康子・日置恒人、OFF4クラスはKEレーシングの桑原彰・歳森泰師、OFFオープンではKEレーシングの小嶋松久・ハロルド・スミスの各選手が1位であった。Aコース総合1位はアパッチ31に乗ったKEレーシングの小嶋松久・ハロルド・スミス選手が受賞した。

1周4km60分耐久Bコースでは、NT3クラスはスパイラルレーシングの小林英雄、NT4クラスはTHEMANの増田隆、NT7クラスはチーム1の小峯宏一の各選手である。Bコース総合1位はマーキュリー150を装着したビクトリー21RSに乗艇したチーム1の小峰選手が受賞した。

1周2.0km3周レースでは、NOD3クラスがスパイラルレーシングの小林英雄、S500クラスは熱海ドルフィンクラブの永尾生吾の両選手が1位を占めた。Cコース最高タイムはスパイラルレーシングの小林英雄選手であった。



第22回大会

第22回大会は熱海沖海底噴火のため取り止めとなった。

第23回大会

第23回大会は、1990(平成2)年7月21日(土)に30隻が参加して行われた。

90分耐久Aコースは、スタート後KEレーシングのアパッチ38が水煙をあげてトップで快走、そのうしろを東海マリンのビクトリーキャットが追う形で周回を繰り返していたが、1時間経過した直後8周目でビクトリーキャットとアパッチの順位が突如入れ替わり、更に2周後の10周目でアパッチはエンジントラブルで力尽きリタイヤ、無念の涙を飲み、東海マリンのビクトリーキャットがそのまま独走体制に入り第23回大会Aコース90分耐久レースで勝利の栄冠をつかんだ。参加艇の数は昨年より減ったがボートは年々大型化、高性能化しオフショアレースの醍醐味を遺憾なく発揮、3万5千人の観客にスリルと豪快なマリンスポーツに1時間30分、13週のドラマに酔いしれた。

1周4km30分耐久レース、BコースのNT4クラスは熱海ドルフィンの永島生吾、NT8クラスはシブヤスピードショップの鈴木渉治の両選手が1位を占めた。Bコース総合1位は、シブヤスピードショップの鈴木渉治選手が受賞した。

1周16km45分耐久レース、AコースNS2クラスがTEAM COLTの臼木勇一・重田健一、OFF2クラスではマーチレーシングの馬場範枝・馬場宏枝の各選手がそれぞれ1位に入賞した。1周16km90分耐久レース、AコースはOFF3クラスのマーチレーシングの高嶋金治・田中耕司の両選手、OFFオープンクラスはビクトリーキャット40に乗る東海マリンの吉川勝人・吉川修一・寺山幸弘・北原秀一の各選手が1位入賞した。

第24回大会

第24回大会は、1991(平成3)年7月20日(土)に行われ38隻が参加した。

Aコース1周16km90分耐久レースは、21隻がエントリーし12時30分スタート、チーム竜の高橋一雄、高橋政治が乗り組む501号艇をトップに21、22回の覇者KEレーシングの小嶋松久・ハロルド・スミスの101号艇が追い、その後に排気量32,670cc、艇長11.98mの国内最大級のKEレーシングの山田一真・中地淳一・ボブ・アイトニーが乗艇する689号、国内オフショアレース3連覇を狙うチームKの細谷公敏、シブヤスピードショップの杉原豊の27号艇が続く。2周目は101、689、5、27号艇の順で激しくトップを争う。3周ではまず5号艇がオーバーヒートで脱落、5周では689号が戦列をはなれリタイヤ。ここから27号艇と101号艇の一騎打ちの争いとなる。熱戦の末101より2フィート短い27号艇が熱海では長艇有利の大方の予想を裏切り15周を1時間30分で走破し、細谷公敏・杉原豊組の27号艇が瀬戸内ローズカップ優勝の余勢を駆って堂々3連覇を飾った。

当日の観客約45,000人は大型艇が水飛沫をあげて快走するオフショアレースの醍醐味を十分に味わった。

1周16km45分耐久レースではNT-8クラスのチームKの松賀直人が総合1位に輝いた。



第25回大会

第25回大会は1992(平成4)年8月1日(土)、34隻が参加して行われた。

この大会では、開催以来初めて大幅にレースコースが変更され、1周の全長は16キロメートルから12キロメートルに短縮、ターンの回数も3回から5回に増えた。また、キャノピー装備のボートクルーに強制されたダンクテスト、ヘリコプターによるレスキュー体制等、安全対策もより強化された。

1周12キロメートルの90分耐久 Aコースは、17隻がエントリーし1時30分開始、トップスタートを決めたのはワイルドキャット112号艇、その後方をKEレーシングの小嶋松久・ハロルド・スミスが乗艇するKEクーガー101号艇が追う。国内オフショア3連覇の実績を持つチームKの細谷公敏とシブヤスピードショップの杉原豊のコンビが乗り込むJA1は、後方スタートという形になった。1周目、観客が見守る中に最初に登場したのはJA1、その後をKEクーガーが追い、早くも前年同様の激しいバトルが展開された。その後もJA1の細谷公敏・杉原豊コンビの力は衰えることなく、1位でフィニッシュ。2位に



は、ラスト1周で3位まで浮上したシガレットジャパンレーシングの中原功二・重松武がKE クーガーをかわして入賞した。1周3キロメートルの45分耐久Cコースは、17隻が参加、NT8クラスのカイトジャパンレーシング・長保和彦が総合優勝を手にした。

第26回大会

第26回熱海オーシャンカップは、1993(平成5)年7月31日(土)熱海湾で実施し、選手76名(46隻)が参加した。

Bコース45分耐久レースでは112号艇ワイルドキャットが初優勝。今年、5月に行われた瀬戸内ローズカップで優勝した25号艇「アーリーバード」松賀選手(チームK)はトップで走っていたが、途中レースを中断して落水した他チームの選手の救助に向かい、結果は3位となった。なお、落水した選手は無事救助され、松賀選手には特別賞が贈られた。

・Aコース90分耐久レース

OFFOPEN 片山 祐男(東海マリン) 佐野 武司(マーチレーシング)

・Bコース45分耐久レース

NT8 村田 正英(MP パワーボートレーシング)

第27回大会

第27回熱海オーシャンカップは、1994(平成6)年7月30日(土)熱海湾で実施し、8クラスに選手60名(41隻)が参加した。

Aコース60分耐久レースでは片山・佐野両選手の年齢合計120歳の熟年コンビが1時間2分56秒で12周を周回して2連覇を達成した。

・Aコース60分耐久レース

OFFOPEN 片山 祐男(東海マリン) 佐野 武司(マーチレーシング)

・Bコース45分耐久レース

NT3000 松賀 直人(チームK)



第28回大会

第28回熱海オーシャンカップは、1995(平成7)年7月22日(土)熱海湾で実施し、8クラスに選手61名(38隻)が参加した。

OFFシリーズ耐久レースでは片山、佐野両選手の112号艇ワイルドキャットが本大会3連覇を飾った。

この大会をもってオーシャンカップレースは、モーターボートの性能向上という所期の目的を達成したとの判断でその幕を閉じた。